その他・学内活動報告
順天堂大学保健看護学部　順天堂保健看護研究 8
P.85－89（2020）

地域住民（模擬患者）参加型の基礎看護実習オリエンテーションの試み

Trial of Basic Nursing Practice Orientation with Participation by Local Residents (Simulated Patients)

石　塚　淳　子[1)]　笹　野　幸　春[1)]　島　田　千恵子[2)]
ISHIZUKA Junko　SASANO Yukiharu　SHIMADA Chieko
近　藤　ふさえ[1)]　大　熊　泰　之[1)]
KONDO Fusae　OKUMA Yasuyuki

要　旨

保健看護学部 1 年生の初めての臨地実習である基礎看護実習Ⅰは学生にとって不安と緊張が大きい。そのため、これまでも学生にとって効果的なオリエンテーションの方法について試行錯誤してきた。2018 年度は、現在進行中である模擬患者の潜在力を活用した授業を発展させ、実習前オリエンテーションに模擬患者参加型の演習を実施した。その結果、学生と実習指導者、実習担当教員からの意見ではおおむね効果的であった。このことから、臨地実習のオリエンテーションにおける模擬患者参加型の演習は、実習グループメンバー間のチームワークを促進し、教員や実習指導者と顔合わせをすることができ、学生の実習への動機づけになることが推察された。今後も三島キャンパスならではの地域住民の力を活用した模擬患者参画の教育方法を模索していきたい。

索 引 用 語：地域住民ボランティア、模擬患者、実習前演習
Key words：Volunteers from local residents, Simulated Patients, Pre-practice exercise

1．はじめに

現在、順天堂大学保健看護学部では基礎看護学や公衆衛生看護学、OSCE で地域住民を活用して学生の教育を実践している。これらの模擬患者役割を担った地域住民が看護教育に期待することは大きく、模擬患者の養成に関するニーズは十分にあると考える[1)－3)]。

保健看護学部 1 年生の初めての臨地実習である基礎看護実習Ⅰは学生にとって不安と緊張が大きい。そのため、これまでも学生にとって効果的なオリエンテーションの方法について試行錯誤してきた。

2018 年度は現在進行中である模擬患者の潜在力を活用した授業を発展させ、実習前オリエンテーションに模擬患者参加型とした演習を実施することとした。本報告は、この授業改善の試みが学生にとって基礎看護実習に対する動機づけとなり、基礎看護の学習を促進することを目的として実施した。

1）順天堂大学保健看護学部
2）元順天堂大学保健看護学部
1）*Juntendo University Faculty of Health Science and Nursing*
2）*Former Juntendo University Faculty of Health Sciences and Nursing*
（Nov. 8, 2019　原稿受付）（Jan. 31, 2020　原稿受領）

Ⅱ．方　法

１．実習の概要

2018 年度基礎看護実習Ⅰは 2019 年１月７日～ 18 日まで、１年生 122 名が前半と後半に分かれて、順天堂大学医学部付属静岡病院、順天堂医院、東京江東高齢者医療センターで実習を行った。実習が開始する１月７日（月）は全学生に対して模擬患者参加型の演習を含む実習のオリエンテーションを実施した。演習には実習病院より実習指導者にも参加を依頼し、学生の実習前演習に参加してもらった。

２．模擬患者を活用した実習オリエンテーションの方法

地域住民 17 名に模擬患者として患者役を演じてもらい、実習グループ毎に代表学生を選び、コミュニケーション演習、日常生活援助の演習（車いす移乗、足浴、環境整備）を実施し、模擬患者からのフィードバック、観察役の学生たちからのフィードバックを行い、代表学生が自己を振り返り、グループメンバーとチームワークを高めて実習に臨む態勢をつくった。

３．データ収集および分析方法

基礎看護実習の終了後、学生に実習への不安や緊張の軽減、グループメンバーとのチームワークの形成、実習指導者と教員とのコミュニケーションの促進についての質問を５段階リッカートによる質問および自由記述による調査を実施した。また、実習指導者と実習担当教員に自由記載のアンケートを行い、実習前演習の効果を分析した。

Ⅲ．結　果

１．学生のアンケート結果

学生への自記式質問紙の結果を肯定意見（大変そう

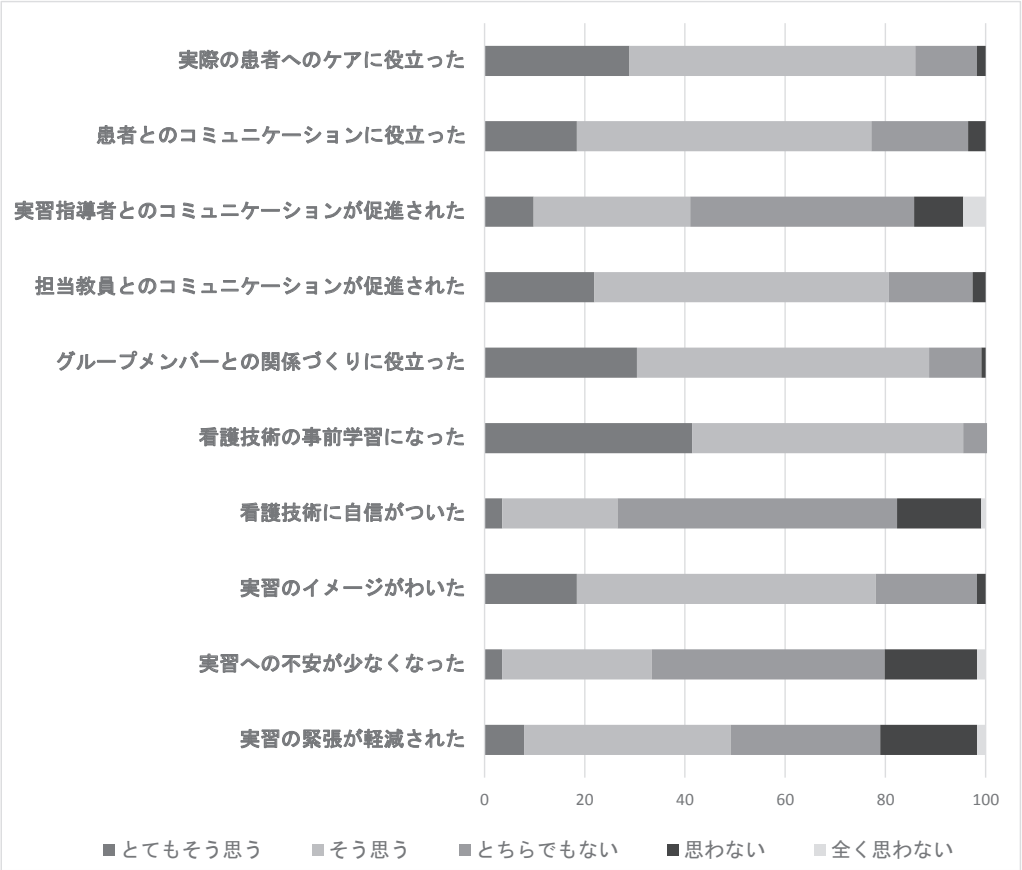

図１：学生へのアンケート結果

思う、そう思う）とマイナス意見(思わない、全く思わない）に分けて集計した。学生120名中「実習への緊張が軽減された」に対する肯定意見は57人(47.5％)であった。「実習への不安が無くなった」に対する肯定意見は39人(32.5％)であった。「看護技術に自信がついた」に対する肯定意見は30人(25.0％)であった。「実際の患者へのケアに役立った」に対する肯定意見は102人(85.0％)「グループメンバーとの関係づくりに役立った」に対する肯定意見は106人(88.3％)「担当教員とのコミュニケーションが促進された」に対する肯定意見は95人(79.2％)であった(図１)。

学生の自由記述をカテゴリー化して分析した結果、肯定的な記述として「患者の気持ちを知ることができ援助前の説明の必要性を理解できた」「初めての実習に向け実習のような環境で演習を行うことにより実習のイメージを描けた」「自分の新たな課題の発見や不足部分を知ることでさらなる練習の必要性を感じた」「実習メンバーの演習を見学することで多くの気づきがあり新たな学びを得られた」「担当教員、指導者、実習メンバーが揃うことで実習前にコミュニケーションを図れた」「実習前に演習や模擬患者からのアドバイスを受けられることで実習に対する不安がやわらいだ」「模擬患者を相手にした演習方法のため実際に活用できるコミュニケーション技術の習得ができた」「実習前に気持ちを引き締めることができる効果的な演習だった」という結果だった（表１)。反対にマイナスの記述として「実習直前の演習であり模擬患者を前に過緊張となったため実習に対する不安が増した」「全員が代表学生になるように演習方法を改善してほしい」という結果だった（表２)。

２．実習指導者・実習指導担当教員の自由記載の意見

模擬患者参加型の実習前演習について、「効果的だった」と答えた教員は 17 名中 14 名（82％)、「どちらでもない」は３名、「効果的でなかった」と答えた教員は１名であった。「効果的でない」と答えた教員は「環境整備と足浴のケアの手順を、学生がどのように習っているのかが分からず、学生も思いついたまま探り探り行なっている様子であり、見ている学生も正解が分からず、患者さんも褒めてくれるだけだったので、アドバイスが困難であった」という意見であった。また、「どちらでもない」と答えた教員の意見は「グループの学生は自分自身の理想像と実施結果がかけ離れてしまい、泣いて落ち込んでしまった。それを見たほかの学生も実習に行くことがさらに怖くなったと言いに来た」だった。「効果的だった」と答えた実習指導者は 13 名中８名（61％）であり、「１年生の技術の習得状況が具体的にわかり、準備に活かすことができた。また使用している道具や手順が違えば、実践で学生が困ると思うので、病院との相違を把握することができた」という意見であった。

Ⅳ．考　察

学生と実習指導者、担当教員からの意見によると、模擬患者参加型の演習はおおむね効果的であった。しかし、少数ながらも貴重な意見として、演習を経験してますます不安になった学生もいた。一般的に不安とは不特定な対象に対する安心できないこと、気がかり（広辞苑）とされ、漠然とした不安が実際に模擬患者を相手に演習をすることで、学生は看護技術の未熟さや、コミュニケーションの難しさを実感し、具体的な不安へと変化していったと考えられる。実際に不安が増した学生を実習でフォローした結果、実習評価は高かった。このことから模擬患者参加型の演習は、グループメンバーのチームワークを促進し、教員や実習指導者と顔合わせをすることができ、学生の実習への動機づけになったと考えられる。さらに学生同士で練習するよりも、模擬患者は実際の患者役に近い存在であり、模擬患者からのフィードバックはポジティブなものであったことから、学生の意欲を増し、看護技術の復習や実習内容の予習に役立ったと考えられる。

表１：模擬患者参画型の実習前演習について（学生の肯定的な意見）

カテゴリ	サブカテゴリ	コード　（抜粋）
患者の気持ちを知ることができ援助前の説明の必要性を理解できた	説明の必要性がわかった	やり方を知らない人でもスムーズに移乗できるようなわかりやすい説明が必要であると感じた。
		今から行うケアの内容を相手にわかりやすく理解してもらえるまで説明する大切さをしった
		「一つ一つ丁寧に説明してくれると患者は安心する」と言ってくれたので、実習でも忘れずに丁寧に説明した。
	患者の気持ち	実際にケアをされて患者はどのような気持ちになるのかを知ることができました。
		実習に行く前に患者さんの気持ちを少しでも知れたので良かった。
		患者さんはどのようなことが不安に感じるのかがよりくわしくわかった。
		模擬患者をみていて患者も恥ずかしいと感じると思いすばやく終わらせることが大切だと思った。
初めての実習に向け実習のような環境で演習を行うことにより実習のイメージを描けた	実習中のイメージができた	実習前に行うことにより、ケアを行うときのイメージがもてた。
		患者に会ったらこんな感じなのかもしれないとイメージを広げることができた
		学生同士で練習をしていたが、模擬患者さんにケアをしているのを見て、緊張感があって、実習のイメージにつながった。
	本番のような体験	設定通りの患者さんを演じてくれていたので、本番のように体験できたように思えた。
		練習と本番の違いを感じることができた。
		具体的な設定があることで、学生で行う技術練習とは違い実践的に演習を展開することができた。
	実習中に余裕が持てた	病院にいったときに少し余裕ができた
自分の新たな課題の発見や不足部分を知ることでさらなる練習の必要性を感じた	新たな課題の発見	実習に向けての課題がみえたので、やれて良かった
		友人でない方に援助の感想をいただけることにより、自分の良いところと直した方が良いところと直したほうが良いとことを確認できたのでよかった。
		足浴を行って、自分の足りてないところを知ることができた
	練習の必要性を感じた	学生を相手に行うよりもはるかに大変だったので毎日練習しようと思い、練習した
		緊張で手順に気をとられて患者とコミュニケーションをとる余裕がなくなってしまうことが分かり、事前の練習の重要性を感じた。
		友達と模擬患者では緊張感が違い、実習に行く前にケアの練習をしなくてはいけないと思、練習ができた
実習メンバーの演習を見学することで多くの気づきがあり新たな学びを得られた	見学で気づく	見学して気がつかなかったことに気づけたので良かった。
		代表学生がケアしているところを客観的に見ることで、良い面と悪い面を知ることができ、自分に置き換えて考えることにつながった
		学生同士の練習では気づくことができないことを知ったり見つけたりできたのがとても良かった。
	新しく学ぶ	友達通しの演習とは違い、気にしてなかった健側患側を気にしながらの練習は初めてで実習を行う前に知れて良かった
		患者の病気、周辺の環境についてわかっていないと適正な援助をすることができない。
		ケアに根拠を持って行うことが患者さんの不安を減らすことができると分かった。
実習メンバーと手順の再確認ができ忘れていた部分を思い出すことができた	思い出せた	忘れていた部分を、みんなで一緒に行うことで思い出した
		代表学生の援助を見ながら援助の方法を思い出すこともできた
		技術はとても良いふりかえりになった
	手順の確認	実習前に演習を行うことで手順の確認をすることができたので良かった。
		感染予防で講義のように手本を見せてから行う型うをしてみて手順などが覚えることができた。
		援助をするのを見ることによって手順を確認することができた
担当教員、指導者、実習メンバーが揃うことで実習前にコミュニケーションを図れた	担当教員とのコミュニケーション	担当の先生とも話ができて、少し安心した。
		教員からアドバイスをもらえて、実習に役立った。
		担当の先生ともお話させていただく良い機会になった
		担当の先生とも話しやすくなったのでこれからも続けて欲しい
	指導者とのコミュニケーション	実習指導者さんと会話や病棟の特徴を聞けてよかった
	メンバーとのコミュニケーション	グループでひとつのベットを共有することで、メンバーとの交流も出来た。
		グループメンバーにそのような緊張を伝えられ、関係性を深めるきっかけにもなった。
		代表学生だったので見ている人から意見をもらえて実習につなげられた
実習前に演習や模擬患者からのアドバイスを受けられることで実習に対する不安がやわらいだ	不安が減った	いつも以上の緊張感でできるので、実習前にやることで不安が減った。
		実習に対して不安が大きかったが、模擬患者で体験できてよかった
		模擬患んに「患者さんに協力してもらうことも大切だよ」とアドバイスをもらい不安の軽減になった
		「緊張しているのはみんな一緒」と思って不安がやわらいだ。
	模擬患者からのアドバイス、意見	模擬患者の一つ一つのアドバイスで、患者側のリアルな本音を聞きだすことができたためとても参考になった。
		患足と健足を間違えたときに模擬患者が痛いといって間違いを指摘してくださったことが印象に残っている。
		実習前に模擬患者に行って、感想やアドバイスが聞けたので高齢者に行うにはどこまでが大丈夫なのかなどが分かった。
	自信がつく	実習前に援助についての意見や感想が聞けて、改善点とか、自信につながった。
	時期良い	実習に対して不安がある中、前日に実習演習を行えたのはすごく良かった。
実習前に気持ちを引き締めることができる効果的な演習だった	身を引き締める	とても緊張したが実習前の良い緊張であったと考える。
		実際に初対面の人を援助する緊張感を感じることができ、実習に向けて気を引きしめることができた。
		学生間で行う演習よりも緊張感があり、良い機会になった
	効果的な演習	実習（2日目～）の前の授業としてとても有意義であると感じた。
		実習前の良い学びになったのかなと思う。
		この制度はあってよかった。
	模擬患者からの謝辞	最後の模擬患者さんの言葉が胸に刺さった。
		麻痺側への側臥位が不可能な場合どのようにすればよいかを考えている時に、模擬患者が一緒に考え動いてくれたのが印象に残っている。
		対応が丁寧だとほめていただいて自信がついた。
模擬患者を相手にした演習方法のため実際に活用できるコミュニケーション技術の習得ができた	コミュニケーション技術の習得	ケアを行いながら患者さんとのコミュニケーションをとることの大変さを感じた。
		援助しながらコミュニケーションをとるのが難しかった。
		初対面の人にどう援助したらいいのかがよくわかった。
		援助をしながら話をするむずかしさ

表２：模擬患者参画型の実習前演習（学生の否定的な意見）

カテゴリ	サブカテゴリ	コード　（抜粋）
演習方法論の要検討	実施環境の変更	代表学生が一人ずつしかできなかったから、回数が増やせたら良いと考える
		見学の人の人数が多くて少しやりづらかった。
		実際の患者さんのように、あえてテーブルや床頭台の上に物を置いて環境整備を行ったほうが練習になると感じた
実習直前の演習であり模擬患者を前に過緊張となったため実習に対する不安が増した	不安の高まり	実習前に不安が高まってしまった
		実際にやっているのを見学してうまくいかないのを見たら不安がさらに大きくなった
		見学だったけど、自分の技術が本当に大丈夫なのか心配になった。
	緊張や焦り	ものすごい緊張感が伝わってきて、プレッシャーを感じた。
		模擬患者というだけで緊張感があり見学だが焦った
		代表学生の援助を見て自分も緊張した
	時期悪い	実習の一週間前くらいにオリエンテーションを行ってほしかった。
		前半だったからすぐに生かせたが、後半だったら（自分が）実習前日がいい。
		直前過ぎて逆に不安に感じたりもしたので、もう少し前にやって、練習してから実習でもよかった。

Ⅴ．今後の課題と方向性

今後の課題として以下の点が挙げられる。

１．実習前演習の時期を実習開始直前ではなく、学生が事前に練習や復習ができる時期に早めることである。そのことで、演習によって確認できた反省点を学生が復習でき、実際の実習で活用できると考えられる。

２．演習方法を見直す。時間と場所の制約から代表学生だけが模擬患者との演習を実演し、周りで見学学生が観察していた方式では、見学学生の満足度が低い。すべての学生に均等に学ぶ機会を設けることが課題である。

３．実習指導者や実習担当教員が演習に参加したのは、学生にとっても効果的であった。しかしながら、十分な打ち合わせの時間がなく、具体的なアドバイスや改善に向けた指導がその場でできなかった。この問題点を解決するために、事前に教員とは演習方法の打ち合わせを行い、基礎看護学の教員だけでなく、全教員が主体的にかかわる方法に改善する。

今後も三島キャンパスならではの地域住民の力を活用した模擬患者参画の教育方法の試みを模索していきたい。

謝　辞

本報告をまとめるにあたり、ご協力いただいた皆様に深く感謝いたします。

なお、本報告は平成 30 年度順天堂大学学長教育改善プロジェクトの助成金を得て行った。

引用・参考文献

1）大滝純次：日本の看護教育への模擬患者導入の意義、看護展望、18（8）49 － 51，1993.

2）山本、伊藤、冨澤、他：看護技術教育のための模擬患者 (Simulated Patient:SP) 養成の実際、千里金蘭大学紀要 12 号、151-160、2015.

3）阿部オリエ、小手川良江、本田多美枝、他：看護学実習前演習に地域住民が模擬患者として参加することの意義に関する研究、日本赤十字九州国際看護大学紀要、11、49 － 58、2012.

4）小手川良江、阿部オリエ、本田多美枝、他：看護学実習前演習への模擬患者導入による学生の学びの実際：学生の気づきから生じた変化に着目して、日本赤十字九州国際看護大学紀要、12、47 － 56、2013.

5）吉田千鶴、佐藤亜月子、城野美幸、他：地域住民が模擬患者として参加した技術演習での学生の学び　今後の学習への動機付けに着目して、帝京科学大学紀要 10 巻、207-214、2014.

6）小薬祐子、志田久美子、長谷川ゆり子、他：一般住民ボランティアによる模擬患者 (Simulated Patient) 参加の基礎看護技術演習における学生の学び、帝京科学大学紀要 10 巻、163-170、2014.

7）玉田雅美、渋谷幸、池田清子、他：地域住民ボランティアが参加する看護技術演習の意義－地域住民の思いと効果－、神戸市看護大学紀要、Vol.18、2014.